Eu-P014 **時間：6 月 8 日　17:00-18:30**

中山基地における波長別オーロラ絶対強度観測の統計解析

Statistical study of auroral absolute intensity: a survey using multi-color scanning photometer observed at Zhongshan Station

菊池　雅行[1]，楊　恵根[2]，劉　瑞源[3]，木山　喜隆[4]，佐藤　夏雄[1]
Masayuki Kikuchi[1], Huigen Yang[1], Ruiyuan Liu[2], Yoshitaka Kiyama[3], Natsuo Sato[1]

[1] 極地研，[2] 極研，[3] 極地所，[4] 新潟大・理・物理
[1] NIPR, [2] PRIC, [3] Department of Physics, Niigata Univ

定常観測において、その絶対強度範囲び強度別出現頻度を予め知っておくことは重要である。1997 年に行われた中山基地(ILAT=74.5,MLT=UT+1.3)のオーロラ分光観測のデータを用いて、427.8nm,557.7nm,630.0nm の各波長に対する絶対強度の出現頻度解析を、各時刻における観測確率密度関数を用いて行なった。この結果高緯度に位置する中山基地の場合、出現頻度の最も高い輝線強度は平均で 61R(427.8nm)、203R(557.7nm)、136R(630.0nm)であり、この値は時刻によって変動するものの変動幅は一桁程度であることが分かった。また MLT19 時付近から各輝線において強度分布範囲が大きく拡大していることが分かった。

定常観測において、その絶対強度範囲び強度別出現頻度を予め知っておくことは重要である。1997 年に行われた中山基地(ILAT=74.5,MLT=UT+1.3)のオーロラ分光観測のデータを用いて、427.8nm,557.7nm,630.0nm の各波長に対する絶対強度の出現頻度解析を、各時刻における観測確率密度関数を用いて行なった。この結果高緯度に位置する中山基地の場合、出現頻度の最も高い輝線強度は平均で 61R(427.8nm)、203R(557.7nm)、136R(630.0nm)であり、この値は時刻によって変動するものの変動幅は一桁程度であることが分かった。また MLT19 時付近から各輝線において強度分布範囲が大きく拡大していることが分かった。